Accounts of
Materials & Surface
Research

「材料表面」創刊への期待

東京理科大学理工学部客員教授・坂本　一民

「表面」が果たした多大な啓発的貢献を思うたびに、廃刊による損失を残念に思っておりました。この度の「材料表面」創刊は、WEB ジャーナルとして表面に関わる科学や技術の最先端を広く啓蒙し、新たなネットワーク構築にもつながるメディアとして、「表面」の更なる飛躍としての役割を果たしてくれることを大いに期待するとともに、ご尽力下さった皆様への敬意と慶賀に堪えません。

思い返してみると早や 45 年も前になりますが、有機化学を学んで就職した際の開発課題がアミノ酸を活用した新規な界面活性剤の開発と応用で、界面科学に無知な私にとって「表面」を通じて学んだことは数えられないほどでした。初学者は、まずは基礎から順に知識と応用力を身につけていくのが王道ですが、開発研究の現場では時間をかけて積み上げていく余裕はありませんでした。そんな中で、具体的なトピックスごとに、その現象の本質と応用を専門外の読者にも伝える趣旨で書かれた「表面」の記事は、当時の私にとって新鮮であると同時に、特にテーマに近い領域の深耕と横方向への応用展開に役立つ多くのヒントを与えてくれました。また、コロイド討論会や油化学会などの専門学会に参加しても浅学の身には理解しがたい先端の議論が、「表面」ではわかり易く解説され著者の先生方を身近に感じて、次の学会の場で教えを乞うきっかけになったこともしばしばでした。

気づいてみれば、その後の長い時間の中で「表面」の関係するほとんどの領域の研究開発を様々な角度から経験し、その間にコロイド部会や油化学会の組織の中から領域の学際的発展のお手伝いもしてきた結果、皆様からは分野の専門家と見て頂くようなことになってしまいました。王道で学んでこなかった我流・亜流の負い目を感じつつ、一方で「表面」を通じて学んだ際(inter)を活かす技（学際、国際、業際・・・）が今の私の支えになっています。創刊される「材料表面」が、特に若い世代の方々に多くの「際」(Inter-action、Inter-disciplinary、Inter-face,・・・）の機会を提供してくれることを願ってやみません。